

Dark Triad について考える

— 脅威状況とネットワークの観点から —

川俣 優

(広島大学教育学部)

目的

Dark Triad (DT)とは、反社会的な特性であるマキャベリアニズム・サイコパシー・ナルシシズムの3つからなるパーソナリティ特性である (Paulhus & Williams, 2002)。先行研究では、DT 特性の冷淡で操作的 (Jones & Paulhus, 2011)、自己制御が不得意 (Jonason & Tost, 2010)といった負の側面に焦点を当てた研究が多く、DT 特性の高い人は対人関係を築くことが苦手とされている。

しかし、DT 特性をもった人も何らかの対人関係を築いて社会で生きていると考えられ、DT 特性の理解のためにはこの視点からの検討が必要であろう。そこで本研究では次の2点について検討する。検討点①は、脅威状況における自己や周囲の人々への認知・行動パターンである。DT 特性が高い人は、自分の死という脅威状況において、自分の周りの人々や自分自身についてどのような思考をもつのか、とりわけ対人関係への志向性を強めるかどうか探索的に検討する。

検討点②は DT 特性とネットワーク (NW)人数の関係である。川本 (未発表)によると、好奇心が強い人は DT 特性が高くなるほど NW 人数が少なくなることが分かっている。本研究では対人関係の指標を複数用意した上でこの調査の追試を行う。

方法

調査参加者 社会人調査モニター228名 (男性114名、女性114名、平均年齢39.1歳)。

手続き インターネット調査会社のオンラインモニターに調査協力のスクリーニングを実施し、参加に同意した調査モニターが web 上で以下の尺度に回答した。

質問紙の構成 日本語版 Dark Triad Dirty Dozen (田村他, 2015; 12項目5件法)と、日本語版 CEI-II 尺度 (西川, 2012; 10項目5件法)で各特性を測定し、次に、親と親しい友人に関する NW 人数項目 (社会的ネットワーク尺度から抜粋)に回答してもらった。最後に、場面想定法で脅威状況での思考について測定した。場面想定法では、死の脅威を想起させるような架空のシナリオを提示

した後に、自作の質問項目 (16項目6件法)に回答してもらった。脅威状況として、隣国との戦争を想起させる集団間条件と、感染率・致死率の高い感染症が流行しているという内容の病気条件の2つを設けた。

結果

検討点①に関して、自作の質問項目を探索的因子分析した結果、「不安・逃避 ($\alpha = .797$)」「関係性重視 ($\alpha = .856$)」「状況の肯定的認知 ($\alpha = .785$)」の3因子が得られた。これについて、DT 得点と脅威条件を独立変数として重回帰分析を行った結果、「不安・逃避」に

「関係性重視 ($\alpha = .856$)」「状況の肯定的認知 ($\alpha = .785$)」の3因子が得られた。これについて、DT 得点と脅威条件を独立変数として重回帰分析を行った結果、「不安・逃避」において DT 得点の主効果が認められた (Figure 1.)。また、「状況の肯定的認知」においても DT 得点の主効果が認められた (Figure 2.)。すなわち、DT 得点の高い人ほど「不安・逃避」得点と「状況の肯定的認知」得点が高かった。

次に、検討点②に関して、DT 得点と好奇心得点を独立変数、NW 人数を従属変数とした重回帰分析の結果、好奇心の主効果は認められたが交互作用は認められなかった。

考察

検討点①に関して、DT 特性が高い人でも、脅威状況において不安や恐怖を感じており、それと同時に脅威状況を自分の境遇を変えたり、地位や名声を得たりするチャンスだととらえていることが示唆された。今後は、脅威状況において DT 特性により実際に行動に違いが現れるのか、行動指標を用いて検討する必要があると考えられる。

検討点②に関して、川本の知見は再現されなかった。この点については、概念的追試ではなく直接的追試を行った上で考察する必要がある。今後は子や親戚などを含めた幅広い NW で再検討する必要がある。

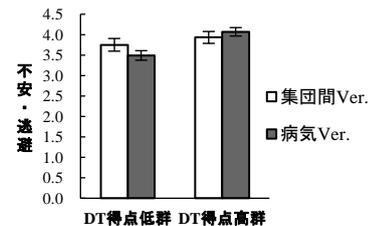


Figure 1. DT 得点と不安・逃避

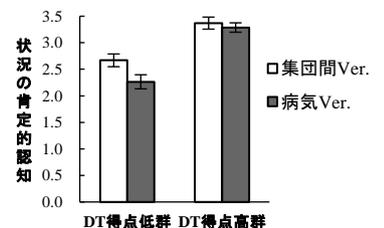


Figure 2. DT 得点と状況の肯定的認知